

## 私は日本語がわからない (6)

中 村 平 治\*

先日、突風の吹く通りを前屈に歩いていると、帽子が私の前方を転んでいきました。私は急いで走りより、つまずきながらも、やっとのことで拾い上げ、誰のかなと目で探している、おばあちゃんが私のところに近づいてくるや、「どうも、あいすみませんでした」と何度も頭を下げました。

今回は「詫び」の一具現化である「すみません」にスポット・ライトを当てます。素朴な疑問ですが、おばあちゃんは私に対して何もわるいことを、つまり、あやまるべきことをいっさいしていないのに、何故、「すみません」と詫びたのでしょうか。聞き手である私に言わせるなら、私は彼女のために苦勞して、拾ってあげるという「利」になることをしてあげたのですから、むしろ「ありがとう」とお礼を述べるべきではなかったのでしょうか。

この疑問に対しては、ごく常識的に、日本語の「すみません」は「感謝」の含みも兼ねているからそれでいいのだという答えが用意されるでしょう。

しかしこの答え方は単純すぎる、おかしいと私は思います。「すみません」と「ありがとう」はそれぞれ独立した表現化であり、この背後に控える「謝罪・詫び」と「感謝・お礼」もそれぞれ相対立する概念だと考えられるからです。両者、別々の実体だと見なすと、この包含的な見方を当てはめるのは道理に反することになりますよね。

---

\* 福岡大学人文学部教授

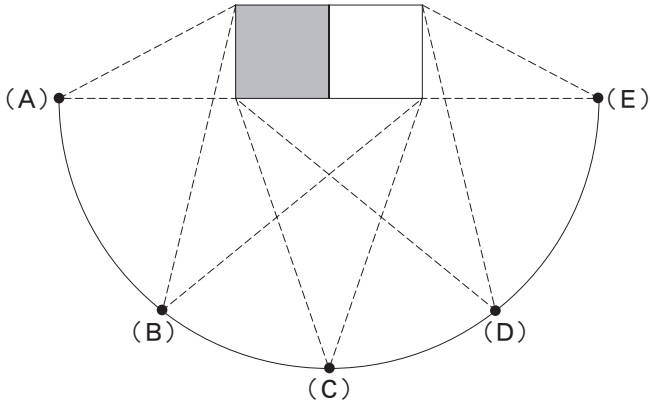
「すみません」が「ありがとう」を兼備するという見方を排除すると、では、先程の見解の相違、即ち、おばあちゃんの詫びと、私のお礼の仕方はどちらが正当化されるのでしょうか。これに対する私の弁護は、どちらも正当化される、別々の表現にわかれているのは、出来事を見据える視点が違っているからに過ぎない・・・です。

以下、私のこの見解を噛み砕いて説明させていただきます。

\* \* \* \* \*

まず、任意の「出来事」を論の拠点とします。これは2通りの行為の結果から成り立ちます。当事者に「不利」か「有利」かのいずれかをもたらします。急いで該当の例を当てると、さきほどの、おばあちゃんの帽子がいったん吹き飛ばされたが、無事、手元に戻ってきた——というのが一つの出来事です。これは、話し相手の足労（不利）の結果、彼女に有利がもたらされたのです。このとき不利に視点を据えると、「すみません」が、有利に目を移すと、「ありがとう」という表現が導きだされます。不利に対しては謝罪が、有利に対しては感謝が当てられるのです。事件が話し手と聞き手の、不利か有利かの二者択一によって出現するというのが当論の軸になる設定です。この辺の状況を図で示します。

図面の読み方ですが、網かけの部分は不利を、空白は有利の領域を示します。(A) (B)・・・は2つの箱を見詰める視点です。(B) から見える領域（網）と見えない領域（白）が7対3の割合であれば、このことは発話者の7割の人々が当事件に対して「すみません」を口頭に寄せ、3割の人々が「ありがとう」を口にするを指します。該当の例に、人様から何か贈りものを頂戴し、反応を下すとき、多数の発話者が「すみません」と口にし、「ありがとう」とお礼を言う人は少数でしょう。



次に視点 (A) からの展望ですが、網の領域しか見えません。白（有利）の部分には後に潜在していて見えないのです。見えないけれども、確かに存在はしています。2つの箱は必然の実体だからです。このことは、見詰める人の100%の人々が「すみません」ということを指します。

謝罪の言葉しか表に出てこなくて、感謝の言葉が奥に仕舞い込まれている、つまり「すみません」しか使えず、「ありがとう」が裏に引っ込んでいる事例として、見知らぬ土地で、道を訪ねるときの冒頭の文句が上げられます。

「すみません、駅へはどう行ったらいいんでしょう」

上の「すみません」は「ありがとう」に替えられません。10割の人々が詫びの言葉を選びます。だからといって、この出来事にお礼の気持ちが全くないわけではありません。この場合、ほとんどの人が道順を教えてくれると楽観視できるからです。そうなると、当然、教えられる方は有利になりますよね。ですから、上の問いかけの内部構造は次の様なものになるのだと考えられます。

「お急ぎのところ、あなたの貴重なお時間を奪ってしまうことになり、大変恐縮ですが、もし教えてくださるという行為を実現してくださったなら、その知識は私めにとって、このうえになく有り難いことになります」

この逆の視点になるのが、(E) です。白、即ち感謝の気持ちしか顕在化しない事件に、定年で同僚を送り出すときの挨拶が挙げられます。このときは、「長年にわたり、本当に、ありがとうございます」とはなむけの言葉を贈るのが常態であって、代わりに「本当に、すみませんでした」とは言わないものです。言わないけれども、口頭に乗せないだけで、潜在的には「いろいろ、われわれ若輩のために孤軍奮闘をしてくださいました、ご迷惑をおかけしました、本当に、すみませんでした」という詫びの気持ちが沸騰している筈です。

(D) からの視点は、(B) の鏡写しになり、該当の例は英語の表現化に多く見られます。これについては後で言及します。

残り (C) からの、つまり網と白、詫びとお礼が等しく見える出来事の事例ですが、これは一般に考えられません。存在しないと見てよいでしょう。

日本語に該当の事例はないのだろうか、この数日間、文字通り日夜、考え込んでいたのですが、なかなか思いつきません。そういう折から、バスに乗っているとき、私はふと耳にしたのです。もったいぶった紹介の仕方で申し訳ありませんが、少し状況を加味すると、私は夕方、駅へ向かうバスに、運転手の斜め横の座席に座っていました。そのバスは停留所で乗客を下ろした後、出発しようとしていました。そのとき前方 10 メートルぐらいのところから、中年のご婦人が片手を挙げながら、小走りに駆け寄ってきました。当バスに乗せてもらいたいという気迫が見て取れました。運転手さんも同じように見て取り、いったん始動したバスのブレーキを踏んだままにしていました。その婦人がバスの昇降口にたどり着くと、ドアが再度開きました。バスの階段を上がったと

ころで、婦人は一息ついて、次のように透き通った声で言ったのです。

「すみませんでした、ありがとうございました」

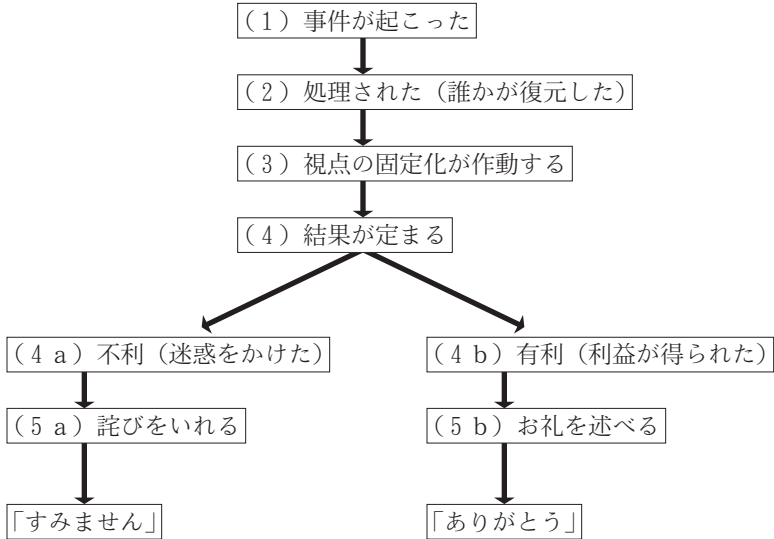
私はこの数日間、探し求めていた「詫び+お礼」の合体表現の例は、まさにこれだと思い当たりました。

以上、図面の読み方を大急ぎで説明しましたが、強引に言及し、予測される議論も素通りした面もありますので、改めて振り返ります。

\* \* \* \* \*

私の論点、即ち「詫び」の「すみません」とお礼の「ありがとう」という具現化は包含関係にあるのではなく、互いに自立した実体であり、二者択一は、当出来事を見詰める視点の置き所によって決まる、というのでありますが、以下、この見解を少しずつ説いて行きます。ご同伴願えたら幸いです。

こと（出来事）の起こりとその後の変遷を一瞥すると次のようになります。



上の図式を文章化します。(1)と(2)が外面にあらわれた原因と結果です。例えば、帽子が吹き飛ばされたが、誰かがそれを捕獲したという顛末です。問題はそのことを叙述するさいの内部構造はどうなっているかです。(3)が「頭脳 (brains)」というか、一種の司令塔です。ここで視点が定められます。視点をどこに置いて、叙述し始めるのかが、この箇所です。視点とは前に描いた半円の図に見るものです。ここでちょっと頁を捲りかえしてご覧下さい。

視点の固定化にはさまざまな要因が出番を主張します。例えば、日本語とか英語の習性が、発話者の性格が、事件の軽重が、雰囲気、先頭争いを言い張るのです。時間的には一瞬の内に決められるのですが、説明するとなると大変な作業になります。(4)でその結果が出ます。事件に語るさいの視点 (A)

(B)・・・への入力となります。(A)なら「不利」へ進み、更に「詫び」に進行し、終点の具現化「すみません」に達するのです。

一方(D)なら右方向の「有利」へ、更に「お礼」へと進行し、「ありがとう」が実現するのです。この方向へは英語において決定的です。英語では相手から何かいいことをしてもらったときとか、贈答品を頂戴したときなど、相手に犠牲を払ってもらい、迷惑をかけたことを十分に承知しながらも、ただただ自分に有利になったことに重点を置き、この認識から Thank you. を口頭に乗せるからです。日英語の対照については再度言及するとして、次に、それぞれの視点に属する該当の事例を加え、図式の確かさを支えておきます。

\* \* \* \* \*

整理しながら事例を納めます。「すみません」に繋がる視点は(A)が義務的なもので、(B)の方向へ移るにつれ任意的なものへと変化します。例えば、「すみませんが、駅はどちらですか？」の文頭の詫びは義務的な前倒しで、「ありがとう」に替えられませんが、何かものをもらったときの返答「すみませんね、高価なお品を頂いて」の前置きは「ありがとう」に任意的に替えられます。この点、英語でも同じで、対応の Excuse me, but・・・は Thank you に替えられません。どちらも相手の貴重な時間を拝借する呼びかけです。

しかし、後者の前置きは、英語では、Sorry, but you brought me something so expensive. に置き換えることができません。日本語では入れ替え可能ですが、英語では不可能です。したがって英語の Thank you very much for・・・は視点の(E)に義務的に固定されます。ここが日英語の違いです。

視点(A)に義務づけられる他の例に日本語の「すみません、その塩をとって下さい」がありますが、これも「ありがとうございます、その塩をとって下さい」

てください」に替えられません。英語でも同じで、Excuse me, but would you pass me the salt? とは言っても、Thank you but・・・とは言えませんので視点 (A) に固定されます。

英語の慣用的な挨拶の表現に、How are you? に対する返答 Very well, thank you. というのがありますが、これは Sorry. に替えられません。したがって、視点 (E) に固定されます。しかし対応の日本語「いかがですか?」に対しては「元気ですよ、どうもありがとう」とも「恐れいります (「すみません」の変異形)」とも二股をかけることができるので、視点 (D) に納まります。

英語の Thanks for inviting me to your birthday party. の Thanks も Sorry に替えられないので、視点 (E) に固定されますが、日本語では「招いてくれてありがとう」とも「申し訳ありません」とも言えるので視点 (D) に納入されます。

これらの事例を見ると、日本語はかなり自由に「詫び」と「お礼」の表現を入れ替えることができるようですが、限度はあります。Sorry, I stepped on your toe. の Sorry が Thanks に替えられないのと同じように「すみません、あなたの足を踏んづけました」の「すみません」は「有り難いことに」に替えられません。意味的におかしくなるからです。この種の「謝罪」また「感謝」の表現は前の半円図の枠外に放りだされます。当論で問題にしている「不利を伴う有利」の総合関係から離れるからです。

日英語の違いということで、もう一例補足すると、日本人は論点の「すみません」とか「ありがとう」の事件の直後だけでなく、その後も数週間後でも、再会したときに、反芻するという事実です。「その節は本当にありがとうございました」とか「あのときは大変に失礼しました」といった風にです。こういったお礼とか詫びを決して繰り返さない英語話者に言わせると、日本人はなんてくどい、しつこいということになります。I have to say "Thank you" again for what you did to me the other day. なんて反復したら、彼らにもう一度



「おねだり」しているのかと勘繰られるかもしれません。

この誤解を避けるためにも、日本人は発想の転換をし、お礼とか詫びを一切カットし、I enjoyed very much last weekend. と述懐するにとどめねばなりません。

以上、論の筋を整理するつもりで書き出したのですが、日英語の比較に終始し、かえって、混乱をきたしましたが、論点の「すみません」の使用に関していくつかの特徴は掴めたのではないかと自負しています。その一つが、この詫びの表現がいかに広範囲に使用されるかという事実です。次に、この点に触れます。

\* \* \* \* \*

「すみません」が広い範囲で、頻繁に用いられるのは、これが日本人特有の個性とも言うべき「謙虚さ」「遠慮深さ」「譲歩」「遠慮」などの性向とうまく解け合うからではないかと私は思うのですが、いかがでしょうか。「すみません」は、文字通りの意味とは単に「済む」+丁寧の否定「ません」の合成にしすぎませんが、実際的には、「詫び」とか「謝罪」の含みを色濃く担っています。「すみません、手伝って頂いて」「すみません、私がいけなかったのです」「すみません、失念しました」などの用例に感じとれる通りです。この感じが日本人固有の「へりくだり」「自己消去」などと直結しているのだと考えられます。そう言えば、日本語には「謙譲語」が頻繁に使用されますが、この傾向も同じ個性の裏づけによるものと見られます。日本人は「小生」「拝見いたします」「足もとに侍らせて下さい」などの表現を好んで使いたがりますが、これと同じ自己見下げの精神が「すみません」の背後に流れているのだと思われれます。

自分を見下げることで、相手を間接的に高め、そうすることで心地よさを相

手に与えようとするのが、日本人の人付き合いの根底に敷かれているようです。論より証拠です、この指向性にあるため、日本語には「すみません」の他、数多くの類義語があります。需要に応じ切れないので、多くの変異刑が追加されるのです。次の例文に見る通りです。

「どうも、失礼いたしました」

「どうも、申し訳ありませんでした」

「本当に、ごめんなさいね」

「ご無礼いたしました」

「お詫びのしようもございません」

「陳謝いたします：」

日本語「すみません」の広域性は、これが相手に対する「注意促し」「注目喚起」にもあえて用いられるという点を指摘することができます。この機能は「すみません」本来の「詫び」とか「頭下げ」のへりくだりの精神とは反対側に位置していると言えましょう。はっきり言って、私は一種の「恐喝」「攻撃」ではないかと思います。レストランでお客が店員に呼びかけるときの「あのう、すみませんが・・・」がそうです。私にはあの呼びかけの声は耳障りです。「おい、その店員、こちらを見ろ、注文の料理がまだきていないぞ」と催促しているかのように聞こえてなりません。このとき「謙虚」さを発揮したいのであれば、声をだして店員さんと呼び止めないで、手前の暗黙の喚起に気づくまで静かにしているのが礼儀ではないでしょうか。せっかくの善意満ちあふれる「すみません」の心地よさを後世に残すためにも、この方向への悪意の使用は慎むようにしてもらいたいと願います。

\* \* \* \* \*

本論の綴じが老人の癖みごとに展開して、申し訳ありませんが、主旨は別のところにありますので、これまでの要点を反省しておきます。

謝罪の明確な表現である「すみません」を、何かいいことをしてもらったりしたときに使うのはおかしいのではないかという素朴な疑問がありますが、これに対して「すみません」は「礼状」の意味合いを備えているから構わない、と返答するのは好ましくないと主張するために私はるる論陣を張ってきました。「すみません」はあくまでも謝罪であって、相手にすまないことを課したことに伴う礼状の気持ちはその奥深い所に隠れていて顕在化していないと私は議論してきました。描いた半円の図でその辺のからくりを示したつもりです。図面を示すと、該当の例文の提示が求められるので、それもある程度満たしたつもりです。「すみません」の正体がわかるにつれて、この特異物質が明らかになり、これを支えるため、英語との比較をするはめになりました。

以上